

# はるかぜ図書館だより

つくば国際大学東風高等学校 図書館 2018年5月発行 No.2



みなさん、こんにちは！5月に入り、暖かくて過ごしやすい日が続くようになってきました。

ゴールデンウィークはゆっくりと休むことができましたか？新年度が始まって一か月ちょっと経ち、そろそろ新生活の疲れも出てきた頃だと思います。そんなときは美味しいものを食べ、睡眠をしっかり取り、休みの日にはリフレッシュして、また新たな気持ちで一週間を過ごしていきましょう！人それぞれストレス解消の仕方は違うので、自分にとって何が気分転換になるかを見つけることも大切かもしれません。

6月には東風祭がありますね。東風クラブや実行委員会を中心に、遅くまで学校に残って頑張っているみなさんの話を聞いて、私も頑張ろう！と活力をもらっています。文化祭が無事に成功するよう、応援しています。



## 読書記録をつけてみよう！

本を読んだ後、みなさんの中にたくさんの感想が芽生えると思います。面白かった、つまらなかった、ちょっと難しかった…。その感想をそのままにするのではなく、読書記録として一冊のノートにまとめてみましょう。書き方に決まりはありませんが、その本のあらすじを自分なりにまとめてみたり、読んだ感想／本のタイトル／作者／読んでいた期間などを書きます。作文の練習にもなりますし、三年生は受験の際の面接などでも役に立つと思います。長い文を読むのは苦手…という人は、新聞でも構いません。気になった記事を貼って、その記事に対して自分はどんなことを思ったのかまとめてみましょう！

## Mother's Day!

5月13日は母の日でした。母の日には赤のカーネーションを贈るのが一般的ですが、カーネーションの色によって花言葉が異なります。たとえば…

- |           |               |           |
|-----------|---------------|-----------|
| 赤：母への愛、敬愛 | ピンク：感謝の心、温かい心 | オレンジ：純粋な愛 |
| 紫：誇り、気品   | 黄色：嫉妬         | 白：尊敬、純潔の愛 |

ちなみに白のカーネーションは亡くなった母親に贈るとされているようです。

母の日、何もしてないなあ…という人は今からでも遅くありません。お母さんに伝えたい気持ちを花言葉にのせて、色とりどりのカーネーションを贈ってみてはいかがでしょうか？



## 百人一首のハナシ

小倉百人一首の中に、筑波山が舞台になっている歌があるのは知っていますか？

筑波嶺の みねより落つる みなのがわ 恋ぞつもりて 淵となりぬる

小倉百人一首・第十三番 陽成院 (第57代天皇 868~949年)



【現代語訳】筑波山の頂から流れ落ちる男女川(みなのがわ)の湧水が溜まり溜まって深い淵となるように、私の中にあるかすかな恋心も積もっていき、今では淵のように深い想いになってしまった。

自然の風景と自分自身の恋を重ねている、とても美しい歌ですよ。

作者の陽成院はあまり素行の良くない人だったようなのですが、当時十代半ばで成人とされていた年齢や、幼くして天皇となった彼の境遇などを考えると、その悪行のほとんどは現代の私たちが言うところの「反抗期」に近いものだったのかもしれませんが。もっと他にも彼の書いた歌を読んでみたいところですが、現代まで残っている歌はこの一首のみとされています。

ちなみに男女川は、筑波山から桜川、霞ヶ浦へと流れていきます。最近では筑波山のパワースポットのひとつとしても知られているそうです。一年生は校外研修で先月登ってきたばかりの筑波山、実はこんな素敵な歌の舞台になっていた…というお話でした。

## 5月の お薦め



どちらも図書館にありますので  
ぜひ読んでみてください♪



ダ・ヴィンチ・コード (上・下) 著：ダン・ブラウン

ルーヴル美術館のソニエール館長が異様な死体で発見された。

館長と会う約束をしていたハーヴァード大学教授ラングドンは、警察より捜査協力を求められる。現場に駆けつけた館長の孫娘ソフィーは、祖父が自分にしか分からない暗号を残していることに気付く…。

実在する場所や人物、有名な絵画に隠された謎を解き明かしながら事件の真相に迫っていきます。実際の絵画と見比べながら読むと「確かにそう見える！」と思うことも多かったです。現実とフィクションがうまく融合していて、読めば必ずルーヴル美術館へと行ってみたいくなる一冊です。

怒り (上・下) 著：吉田修一

若い夫婦が自宅で惨殺され、現場には「怒」という血文字が残されていた。犯人は山神一也・27歳と判明するが、行方は分からず捜査は難航していた。そして事件から一年後の夏。房総の港町で働く親子、大手企業に勤める会社員、沖縄の離島で母と暮らす少女の前に、三人の身元不詳の男が現れた…。

千葉・東京・沖縄の三か所が舞台となっていて、それぞれの場所にいる主要人物の視点から、身元不詳の男が何者なのか語られていきます。各々、その男との関係性は異なりますが、大切な存在であるという点は共通しています。人の強さ、脆さについて深く考えさせられる一冊でした。